

佳作

『言の葉の庭』 新海誠著

文学部 文学科 4年 松本航平

日本には「雨」という字の付く熟語が百以上存在する。広辞苑を引くと「五月雨」や「時雨」といった雨が降る時間に関わる言葉もあれば、「喜雨」や「慈雨」といった降った時の気持ちを代弁させたような言葉もある。これらの言葉は、昔の人々が、様々な形で雨と向き合った事実や歴史を私達に感じさせる。現代に暮らす私達は、そんな雨をどこか憂鬱な存在として感じているはずだ。外へ出かけるのが少し億劫になる、気分が少し落ち込む。誰もがこんな思いを一度は経験したことがあるだろう。今回紹介する本は、そんな私達が忘れかけていた雨の持つ多彩な表情を思い出させてくれる一冊である。

「言の葉の庭」は、漠然とした夢を追い求める普通の高校生・秋月孝雄が、雨の日偶然出会ったユキノという女性との関りを通して、夢について考える姿を描いたアニメーション映画である。小説「言の葉の庭」は、その映画の内容を下敷きとした群像小説であり、孝雄やユキノの関係者の物語が追加されている。

この本の登場人物は、自分の思っている事を素直に言葉に出来ない人間として描かれている。そのため、口から出た言葉には歪みが生じ、自分の意図しない形となって相手に伝わっていく。それは文体にも明確に表れ、鍵括弧に括られて表に出て来た会話文の真意は、前後の会話主の心内文によって否定的または不確かなものとして上書きされる。

雨は、そんな登場人物に変化を与える存在として配置されている。特に孝雄とユキノが、互いに秘めていた想いをぶつける場面では、雷を伴うにわか雨が、互いの本心を知るにつれ晴れ、金色のお天気雨に変わっていく。この流れは、雨のという流れの推進力を感情の流れとリンクさせた見事な描写と言える。

このような描写を駆使して新海誠の描きたかった想いとは何だったのだろうか。私は自分の姿を偽って暮らす人間の姿と、救いとしての自然・「雨」だったのではないかと強く思う。自分の本心を素直に伝える事が出来無い登場人物、それは見方を変えれば伝えられる相手がいない孤独な人々とも言える。本来時間をかけて築き上げる必要のある人間関係は、急速に変化する現代社会の中で、どこか脆さを露呈し始めている。虐待、いじめ、パワーハラスメント、自殺、こういった文字が近年急激に増加した背景には、乾いた人間関係の存在が隠れている。

そんな世界では誰しもが、自分の言葉を本気で受け止めてくれる救済者を探している。新海誠はそういう乾ききった人間関係に潤いを与える存在として、日本人にとって関わり深い自然現象である「雨」にその役目を託したのではないか。

「言の葉の庭」のキャッチコピーは「愛よりも昔、孤悲のものがたり」だ。この本は孤独な悲しさを感じている現代人の心に忘れていた雨の力を思い出させてくれる作品だと願っている。